

第3章 事例から学ぶ支援のポイント

1. ケーススタディ（架空事例）

1 家族への相談対応の支援事例（架空事例）

これまでも酒好きではあったが、仕事人間だった。定年退職後は何もすることがなく飲酒量が増え、この頃は朝から1日中飲んでいる。酩酊して室内で失禁したり、妻への暴言、中学生の孫に酒をすすめる等があるが、本人は全く覚えていない。最近、脱水症状等で緊急入院をくり返し、認知機能の低下も疑われる。入院をきっかけに病院 SW の勧めで介護サービス等の導入を検討しているが、妻は「本人は酒好きなので、飲ませてあげないとかわいそう」と言っている。

● 事例における課題の整理

- 心身の課題** 脱水症状で緊急入院を繰り返す。認知機能が低下している。
- 社会生活上の課題** 中学生の孫に酒をすすめる妻へ暴言を吐く。一方、妻は「飲ませてあげないとかわいそう」と言っており、イネーブリングの状態になっている。
- 経済的な課題** 経済的な課題は特に見られないが、ツケで飲むことや飲酒のための借金があるかもしれない。
- 背景的な課題** 定年退職により仕事を失ったことによる喪失感が考えられる。

● 連携機関・団体

- <区役所>
 - ・高齢者支援担当
- <関係機関等>
 - ・地域ケアプラザ
 - ・医療機関
 - ・ケアマネジャー
 - ・介護サービス事業所
 - ・家族会
 - ・回復支援施設、自助グループ

● 支援の方向性

- ！ポイント① 高齢者の身体や認知機能の見極め**
 - ・高齢者のアルコール依存は、死につながる危険があります。また、認知機能の低下がアルコールに起因するものか等の見極めが必要です。
- ！ポイント② 家族の理解を深める**
 - ・家族が、依存症そのものや、依存症の本人への対応について理解を深めることで、家族の本人に対する対応の変化を促す。
 - ・本人や家族に状況をわかりやすく説明することが大切。

● 連携支援のポイント

- ！ポイント① 関係機関と連携して家族の理解を深めましょう**

本人は、孫や妻にも依存していると考えられます。孫や妻が明確に意思表示することで、本人の行動を変えるきっかけになります。お孫さんから「酔っているおじいちゃんは嫌だ。自分は飲みたくない」と伝えること、また、妻が暴言に対して「No!」と言えるよう、家族の理解を深めていくことが大切です。そのためには、家族を家族会や行政の家族教室等へつなげていくことが考えられます。

ただし、年齢などによって依存症への理解を深めることが難しいことも考えられます。その場合には、本人が残りの人生をどのように考えるか、家族の考えも考慮して支援の方向性を検討していくことが求められます。
- ！ポイント② 本人を専門医療機関や回復支援施設等へつなぎましょう**

緊急入院をしていることをきっかけとして、専門医療機関につなぐよう介入することが考えられます。医療機関から、腎機能・肝機能が低下していること、このままいくと破綻することなどを伝えてもらうことも手です。

また、年齢にもよりますが、医療機関のデイケアや自助グループ等へのつなぎ、お酒以外の楽しみを見出すきっかけを作っていくことが必要です。

2 緊急介入の判断と専門機関につなぐタイミング（架空事例）

結婚して子どもを3人出産したが、夫の浮気等が原因で離婚。以降はパートをしながら、母子で生活保護を受給して生活。本人は真面目な性格で、パート・子育てをしながら1人で家事も完璧にこなし、頑張っていた。ある時、交際男性からの誘いで覚せい剤を使用。はじめは交際男性と一緒に時のみ使用していたが、そのうち覚せい剤を買うため借金をするようになる。本人は覚せい剤使用で逮捕。児童相談所は小学生・中学生の2人の一時保護を検討していたが、中学生は高校受験・小学生は卒業式を控えていたことから一時保護を拒否。本人が戻るまで、高校生の娘が2人の弟の世話をしていた。本人は家事など完璧にこなしていたこともあり、逮捕されるまで周囲は全く異変に気づかなかった。本人は初犯で、執行猶予となり、間もなく自宅へ戻る見込み。

● 事例における課題の整理

- 心身の課題** 覚せい剤使用により身体的に身動きが取れなくなったり、幻覚妄想状態となっていたわけではない（家事は完璧にこなしていた）。
- 社会生活上の課題** 逮捕後に本人が自宅に戻るまでの間、子ども3人だけで生活。
- 経済的な課題** 母子で生活保護を受給して生活しており、覚せい剤を買うため借金。
- 背景的な課題** 家事などを完璧にこなし、交際男性からの誘いを断り切れない真面目な性格が、本人を追い込んでいる可能性。

● 連携機関・団体

<区役所>

- ・生活支援課
- ・こども家庭支援課

<関係機関等>

- ・児童相談所
- ・医療機関
- ・保護観察所
- ・警察

● 支援の方向性

①ポイント① 背景課題への対応

- ・家事や育児の疲れ、孤独感から薬物に手を出した可能性が考えられるため、無理のない生活スタイルを支援することで再発を防止。

①ポイント② 子どもたちへのケア

- ・本人が不在の間の子ども達へのケア。
- ・高校生の娘がヤングケアラーとして、我慢する・頑張りすぎる（過剰適応）性格形成へのリスク対応。

● 連携支援のポイント

①ポイント① 本人のモチベーションに寄り添いましょう

家事を完璧にこなしていたことを考えると、子どもと一緒に生活することを強く願っていることが予想されます。なぜ薬物が必要になったのかを本人が理解し、頑張りすぎない生活スタイルを作っていくうえで、医療機関、生活保護担当者、児童相談所等が連携し、本人が他者に頼れるよう支援を継続することが大切です。

また、この事例の場合は、必ずしも回復支援施設や自助グループにつながなくてもよいかもしれません。本人の動機づけの状態に加えて、背景課題（被虐待歴の有無や疾患等）や薬物に誘う男性の存在も視野に入れて連携先を検討することが大切です。

①ポイント② 子どもへの対応を考えましょう

生活支援課、こども家庭支援課、児童相談所等が連携して、子どもへの対応を進めることが大切です。特に、母親が不在の間、子どもたちだけで生活していることに対しては、定期的に見回りを実施するなどの対応が求められます。

3 借金・債務整理を伴う支援事例（架空事例）

大学の頃から、仲間と一緒に競馬に行くようになる。就職後は学生時代の仲間とは時間が合わなくなったが、休日の楽しみは1人で競馬に行くことだった。仕事がうまくいかなかった時は、当たると嫌な現実から逃れることができた。コロナ禍で外出が制限されるようになってからは、オンラインで楽しむようになった。はじめは給与の範囲内でやっていたが、そのうち借金をしてやるようになり、次第に借金を返済するために競馬をするという悪循環に陥っていく。

自宅に督促状が届くようになると、そのたびに親に泣きついて肩代わりしてもらい、返済の目途が立つとまた再び競馬を始めるということを繰り返した。定年間近の親からは「老後のための貯金も使い果たしてしまい、これ以上の肩代わりはできない」と言われた。膨らむ借金を何とかしようとFXに手を出し、どうにもならない程の借金を背負い、会社のお金を5,000万円横領して失踪。本人は自暴自棄になり、自殺を試みたところを発見され救命救急センターに運ばれた（後遺症は残らない見込み）。

● 事例における課題の整理

- 心身の課題** 自暴自棄になり自殺を試みるまで追い込まれている。
- 社会生活上の課題** 会社のお金を横領する。一方で、家族は借金の肩代わりをしており、いわゆるイネーブリングとなっている。
- 経済的な課題** 借金返済のためにギャンブルを行う。督促状が届く。会社のお金を5000万円横領する。
- 背景的な課題** 就職後の孤立感や、現実に対する挫折感や逃避傾向が考えられる。

● 連携機関・団体

<区役所>

- ・ 障害者支援担当
- ・ 生活支援課

<関係機関等>

- ・ 医療機関
- ・ 家族会、家族教室
- ・ 警察
- ・ 司法書士、弁護士
- ・ 回復支援施設、自助グループ

● 支援の方向性

①ポイント① 本人の自立を支え、家族の理解を深める

- ・ 家族を頼らない自分の生き方を身に付けていけるよう、多機関で連携した支援を進めていく。
- ・ 家族が、依存症そのものや、依存症の本人への対応について理解を深めることで、家族の本人への対応の変化を促す。

①ポイント② 借金問題への対応

- ・ 借金やお金の話はしにくいと思うが、特にギャンブル等依存症の疑いがある場合には洗いざらい聞く必要がある。

● 連携支援のポイント

①ポイント① 多機関で連携して本人の自立を支え、家族の理解を深めましょう

救命救急センターから専門医療機関、そして回復支援施設へつないでいくことが考えられます。本人の生活を支えるうえで、生活保護などを検討するという可能性も考えられます。

家族は、依存症の一般的な対応や、依存症自体について、理解を深めることが大切です。また、本人の自立した生活を促していくためには、家族が本人と距離を取れるようになることが欠かせません。そのために、家族会や行政の家族教室につないでいくことが重要です。

①ポイント② 借金問題への対応を考えましょう

借金については、隠しているとそこから増えていくので、すべて明らかにすることが回復のために重要です。

高額な借金や横領等は司法書士・弁護士などの専門家と連携し、本人の今後の生き方を一緒に考えていくことが大切です。

2. 他機関・団体につなぐときに大切にしたいこと

受容・共感的な姿勢で本人・家族と対話を重ね一緒に考えていき、他機関・団体につないだ後も自機関・団体で対応できることは引き続き支援するなど、各機関・団体が丁寧に関わることで、切れ目のない支援の提供を目指す「横浜市の依存症支援ネットワーク」へつながっていくと思います。自機関・団体から他機関・団体につなぐ際に、それぞれが以下の3つのことを共通認識として大切にすることで、本人・家族が必要な支援からこぼれ落ちることを防ぐとともに、機関・団体間の連携強化にもつながります。

●目の前の困りごとだけでなく、その背景に潜んでいる課題等にも焦点を当てること

最初から本人が相談に見えることは稀で、多くの場合、まず家族が相談に見えます。家族はこれまで誰にも相談することができず、心身ともに疲弊し、混乱し、状況を客観的に理解することが難しい状態で来所する場合も多々あります。わらにもすがる思いで相談した家族の思いと困り感に寄り添い、家族への支援を行きましょう。本人がいなくともできることはたくさんあります。

また、本人が来談した場合は、本人の主訴や課題等について慎重に聴き、依存症の状態や動機づけの程度、その背景に潜んでいる課題などを含めたきめ細かいアセスメントを心掛けましょう。それらを踏まえ、どのような優先順位で支援を実施するか、どのようなアプローチを取るかを慎重に判断しましょう。

●継続的に関わりタイミングを見極め、丁寧につなぐこと

多くの場合、本人は依存症を否認したり支援を拒否するなど、動機づけが低い状態にあると思います。治療に対する前向きな姿勢を引き出していくためには、継続的な関係性を作っていくことが必要です。その間、依存症の問題ばかりに焦点化せず、他の課題への対応を優先することも考えられます。

また、本人を専門機関や治療機関につなげるには、タイミングが非常に重要です。本人が反省している時や助けを求めてきた時などのタイミングで適切な治療につなげるうえでも、継続的に関わり、日頃から状況を把握しておくことが大切です。

●つないだ後のフォローも大切にして、連携して支援すること

依存症の本人は多様な生きづらさを抱えていることがあります。また、依存症になったことに伴い、社会的・身体的・心理的に様々な問題を抱え込んでいるかもしれません。加えて、依存症の段階によって本人の状態が異なるとともに、両価性を持つため、時として本人の発言に矛盾が生じます。そのため、本人が抱える問題や状態などの必要に応じて関係機関・団体と連携を取るとともに、多角的に本人の情報を収集していきましょう。

また、ご家族についても、依存症の段階に応じて状態が異なり、家族の構成などによっても必要となる支援も異なります。家族のニーズに対応するうえでも、必要に応じて様々な関係機関・団体と連携を取ることが求められます。

適切な機関・団体につなげることは大切ですが、つなげたから終わりではなく、各機関・団体がそれぞれの役割を確認しながら支援するという視点も大切です。

また、個人情報の取り扱いに留意して、つなげた後もしばらくは支援を継続するなど丁寧な関わりが必要です。

個人情報の取り扱いについて

- 他機関・団体との連携は大切ですが、個人情報の取り扱いには注意が必要です。本人や家族から同意を得て、情報共有・情報提供するようにしましょう。
- 一度同意をもらっても、周囲との相談後などに気持ちが変わることもあるので、何度か意向を確認することが大切です。

